

東海地域の言語実態調査 (4)

名鉄名古屋本線沿線調査の語彙

吉田健二 青山昂央 赤川未奈 石神陽花
大野藍子 川原帆花 川原龍真 倉知澄聡 小島恵
榊原優惟 佐橋もえ 鈴木美咲 田中綾乃
中村友美 宮地萌衣 永井美妃

1. 本稿の目的

愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」では、2014年度より「学外教育活動」として言語調査を実施しているが、2018年度より同一の項目による継続的な調査を開始し、吉田健二・他(2019, 2020, 2023)で結果報告をおこなった。本稿では2023年8～9月に名古屋鉄道名古屋本線沿線の4区・5市(名古屋市中村区から岡崎市)でおこなった調査の結果を中心に報告する。調査地は愛知県の尾張地域から三河地域までをカバーしており、調査結果からは両者間に一定の地域差があることがうかがえる。本稿では語彙項目の地理・年齢分布に焦点をあてる。

2. 話者と調査概要

お会いした話者は表1の34名である。生育地(5～15歳ごろをもっともながくすごした場所)が上述の、予定した調査地外の方がいたので(愛知県一宮市、名古屋市西区、愛知県幸田町)、その地域を代表する話者として報告する。以下では各話者を生育地と年代(2023年10月1日時点)をくみあわせた略称によってよぶ。話者の年齢は11歳(南10)から79歳(中村70)。南区で複数の同年代の話者がいたので、年齢がたかい順に南50-1, 南50-2, 南30-1, 南30-2とする。

表 1 話者情報

| | 略称 | 生育地 | 性 | 生年 | 他地居住歴 |
|----|--------|---------|---|------|-----------------------|
| 1 | 一宮 60 | 愛知県一宮市 | 男 | 1954 | |
| 2 | 西 50 | 西区山田町 | 女 | 1967 | 22 東京 28-40 北海道 |
| 3 | 中村 70 | 中村区中村町 | 女 | 1944 | |
| 4 | 中村 50 | 中村区中村町 | 男 | 1970 | 19-23 愛知県豊橋市 |
| 5 | 中村 40 | 中村区中村町 | 女 | 1973 | 19-20 北区、27-34 愛知県安城市 |
| 6 | 中村 30 | 中村区中村町 | 男 | 1987 | 19-28 東京 |
| 7 | 中村 20 | 中村区中村町 | 男 | 1995 | |
| 8 | 熱田 40 | 熱田区沢上町 | 男 | 1979 | |
| 9 | 南 70 | 南区笠寺 | 男 | 1951 | |
| 10 | 南 60 | 南区内田町 | 男 | 1954 | |
| 11 | 南 50-1 | 南区本岬町 | 男 | 1969 | |
| 12 | 南 50-2 | 南区鳥山町 | 男 | 1973 | 18-20 東京 |
| 13 | 南 30-1 | 南区内田橋 | 男 | 1988 | 16-18 愛知県豊田市 |
| 14 | 南 30-2 | 南区星崎町 | 男 | 1974 | 22- 緑区 |
| 15 | 南 10 | 南区本星崎町 | 女 | 2012 | |
| 16 | 緑 40 | 緑区常安 | 男 | 1981 | -6 熱田区 20-40 天白区 |
| 17 | 豊明 60 | 豊明市阿野町 | 男 | 1958 | 18-23 天白区 |
| 18 | 豊明 50 | 豊明市新田町 | 男 | 1964 | -13 瑞穂区 |
| 19 | 豊明 40 | 豊明市三崎町 | 男 | 1983 | -2 緑区 |
| 20 | 豊明 30 | 豊明市新田町 | 男 | 1989 | -4 緑区 |
| 21 | 刈谷 50 | 刈谷市小垣江町 | 男 | 1966 | 18-24 京都 |
| 22 | 刈谷 40 | 刈谷市小垣江町 | 男 | 1977 | -4 愛知県大府市 |
| 23 | 刈谷 30 | 刈谷市東境町 | 男 | 1989 | -5 豊明市 18-22 三重 |
| 24 | 刈谷 20 | 刈谷市井ヶ谷町 | 女 | 2000 | |
| 25 | 知立 50 | 知立市新林町 | 男 | 1967 | -10 神奈川 |
| 26 | 知立 40 | 知立市新林町 | 女 | 1981 | |
| 27 | 安城 50 | 安城市新田町 | 女 | 1969 | 岐阜県多治見市に出勤(4年) |
| 28 | 安城 40 | 安城市篠目町 | 男 | 1977 | |
| 29 | 安城 30 | 安城市里町 | 女 | 1991 | 24-29 愛知県三好市 29- 刈谷市 |
| 30 | 安城 10 | 安城市篠目町 | 男 | 2005 | |
| 31 | 岡崎 50 | 岡崎市東蔵前 | 男 | 1966 | 18-33 東京 33-35 長野 |
| 32 | 岡崎 40 | 岡崎市藤川台 | 女 | 1979 | -4 東京 - 10 大阪 |
| 33 | 岡崎 30 | 岡崎市南若松 | 女 | 1987 | 18-22 新潟 |
| 34 | 幸田 20 | 幸田町大草 | 女 | 1997 | |

この他に一名、言語形成期が東京という方がいたが、以下の検討の対象からはずす。「他地居住歴」欄にしめしたとおり、下のお二方をのぞき生育地以外ですごしたのは幼少期か高校卒業年齢以降であり、それぞれの調査地のことを代表するかたがたとみなしてよいとおもわれる。知立 50 は 10 歳まで神奈川で、豊明 50 は 13 歳まで名古屋市瑞穂区でと言語形成期のうちながい期間を他地ですごしており、それぞれ当該地を代表する話者とすることに疑問がもたれるが、それぞれそれ以降 40 年以上を当該地ですごしており、知立・豊明の話者とみなして以下の報告をすすめる。結果の解釈には注意を要するが、例外的な回答をした項目はないようである。

調査は現地の会議室などで実施し、筆者のうち吉田が 9 地点すべて、ほかはそれぞれ 2 地点に参加した。一人 1 時間ほどの内容だが、諸事情により完了できないことがあった。そのばあい、後半の項目について記入式の質問紙をお預けし、終了しなかった部分を記入して後日郵送していただくようお願いした。この「部分的留め置き」方式を採ったのは 3 名で、全員からご回答をいただいた。ご厚誼に感謝したい。

3. 先行研究の略称

本稿でたびたび言及する先行研究について、以下の略称をもちいる。

| (文献) | (略称) |
|-----------------------------|-------|
| 『日本言語地図』(国立国語研究所 1966~1974) | LAJ |
| 「東海道グロットグラム調査」(井上史雄 1992) | 『東海道』 |
| 『近畿言語地図』(岸江信介・他 2017) | 『近畿』 |
| 『改訂増補統一版岐阜県方言辞典』(山田敏弘 2017) | 『岐阜県』 |
| 『新・日本言語地図』(大西拓一郎・他 2016) | NLJ |

4. 調査項目

2018 年度調査から調査項目を固定しており、今年度の調査もおなじ項目を調査している。詳細は吉田・他(2019, 2020, 2023)を参照されたい。今年度追加した調査項目もあるが、紙幅の都合上、以下の報告で触れる。

5. 結果

結果を世代と地域により整理した結果、地域差がうかがわれた項目が複数みいだされた。一方、地域差は明瞭でなく、年代差があることがうかがわれた項目もある。以下、順に報告する。

5.1. グロットグラムの構成

過去の報告同様、「地域×年齢」の図（glottogram）を作成した（図1～17）。横軸には各話者を名鉄名古屋本線の営業距離にしたがって配置している。図の左から右にかけて、各地点が北西から南東（尾張～三河）にならぶ。ただしそれぞれの話者の生育地から最寄りの（名鉄線の）駅の位置とした。このためおなじ調査地の話者でも微妙に位置が異なり、生育地の位置関係がより正確に反映される。たとえば、緑40は緑区のうちとなりの豊明市にちかい地区の生育である。また岡崎40と幸田20は両市町の境界付近の生育で、いずれも名鉄本線の藤川駅が最寄りと判断されたため、おなじ位置にある。また西50は名鉄名古屋線の西枇杷島駅を最寄りとしたため中村の話者のすぐちかくにあるが、生育地の西区山田町は名鉄名古屋線からかなり離れたところ（北西に約3.8km）にある。一宮はほかとはなれているので、表示範囲を短縮するため距離をちぢめた（9.4km短縮；縦線で標示）。縦軸は2023年10月1日時点の年齢である。複数回答のばあい、よりよく使うという情報を得たほうを左に配置する。

5.2. 地域差がみられた項目

5.2.1 小学校の通学グループ（図1）

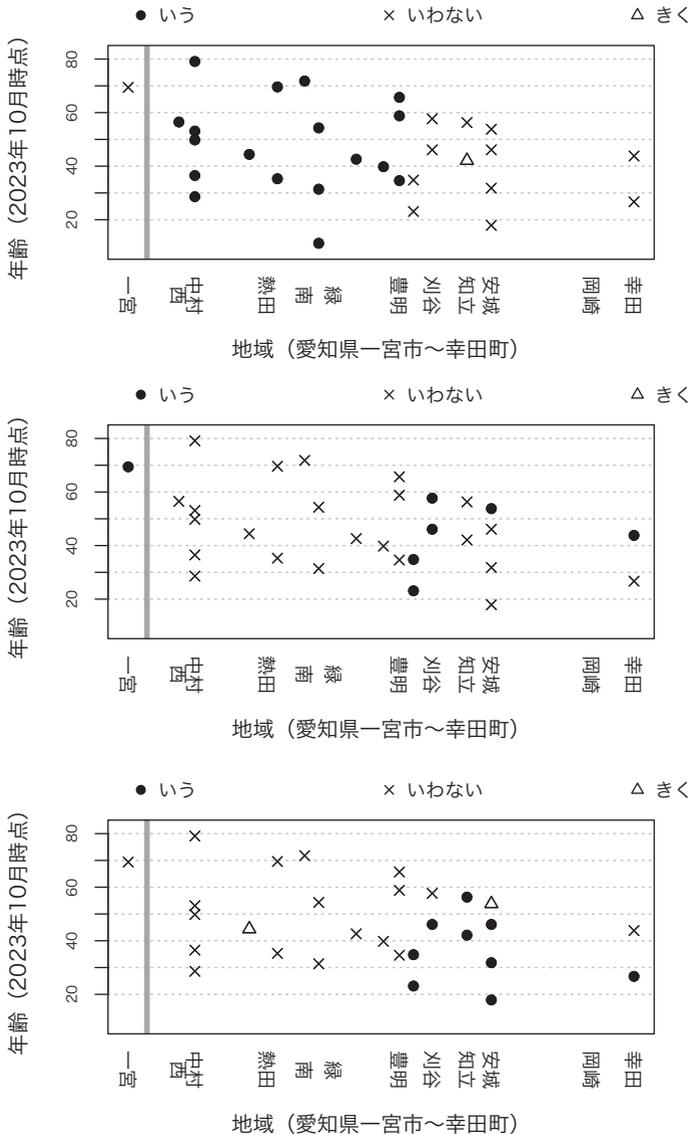


図1 小学校の通学グループ：上から「分団、通学団、通学班」の使用

2020年度から調査を開始した、家が近い生徒で集まり登下校をおこなう際のグループの呼び方について、「分団」「通学団」「通学班」の使用をみる（「登校班」「地区班」も調べたが、「使う」という回答がなかったので省略）。「分団」が豊明から西、「通学団」「通学班」が刈谷から東と、豊明・刈谷を境に明確に分かれる。行政区画上の尾張・三河の境界と一致する。三河側に「通学団」「通学班」の両方の使用をこたえた話者もいるが、おおくはそのうち一方をこたえている。昨年度の調査（吉田・他 2023：10）では、「分団」の使用回答は岐阜東濃から得られ、愛知北部の春日井市では「通学団」が優勢だったので、そこから名古屋市内に至るどこかでふたたび「分団」に入れ替わるのだと推測される。学校や行政単位で使用が決まる語だとおもわれるが、「分団～通学団～分団～通学団/班」と一定の領域をもった複数の入れ替わりがあるようで、全体像を見出すためさらに調査する必要がある。（田中・榊原）

5.2.2「バカ・アホ・タワケ」の使用と印象（図2）

昨年度から調査している項目である。バカはほぼ全員が「使う」だったので、アホ、タワケの使用についての結果をしめす。アホは使用が西にかたよる。ただし岡崎、幸田にもみられ、三河に入ると使われなくなるということではない。アホは近畿で優勢である一方（『近畿』6図）、TVなどの影響により全国的に理解・使用が拡大しているとみられるが、今回の結果をみると近畿地方との地理的近接性の影響もあるようで、地続きに伝播する側面もあることがうかがえる。タワケは「使う」がほぼ尾張にかぎられる。松本（1993）によると、30年ほどまえこの地域ではアホとタワケが拮抗し分布が錯綜しているが、それから推測されるより明瞭な地理的対立が見出された。また世代差もみられ、30歳代以下に使用の回答はなかった。昨年度の調査によればアホ、タワケとも東濃でも使われており（吉田・他 2023：16）、愛知尾張と地理的分布が連続する。

アホ・バカ・タワケについて、他人にそう言われた時の「キツさ」の印象もしらべた。昨年度とおなじく個人差が大きく（吉田・他 2023：16-17）、地域差と年齢差との関係は明確化でない。ただし全体的にアホとくらべてバカ、タワケに「キツくない」という印象があるとこたえる傾向がみられ、その差は統計的に有意だった（対応のあるt検定：いずれも $p < .05$ ）。この印象の地域差（尾張・三河）について吉田・他（2024：9）で報告した。あわせて参照されたい。（石神・川原）

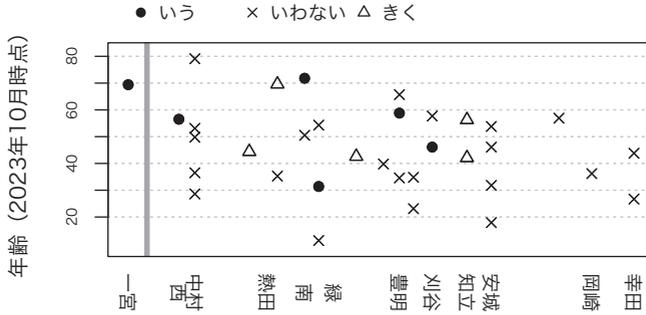


図4「ややこやしい」の使用

5.2.5 あざ (図5)

前年度調査では、岐阜東濃～尾張北部でクロジ、クロニエ（タ）など、クロ系がまだ一定の勢力を維持していることがうかがわれた（吉田・他 2023：9）。今回の調査でも北端の一宮・西区からクロジが得られた。それ以外では全国的な傾向（三井 1999、吉田・南波 2019：91）をうけてアオ系がつよいが、クロジのクロがアオに取り替えられたアオジ、アオジンタンは尾張にかたより、三河側では共通語のアザ、全国的に有力になっているアオタン、アオアザがつよい。LAJ80 図では尾張がクロ系、三河がチシヌ系という対立がみられるが、これを基盤とした対立が維持されているのだとおもわれる。（吉田）

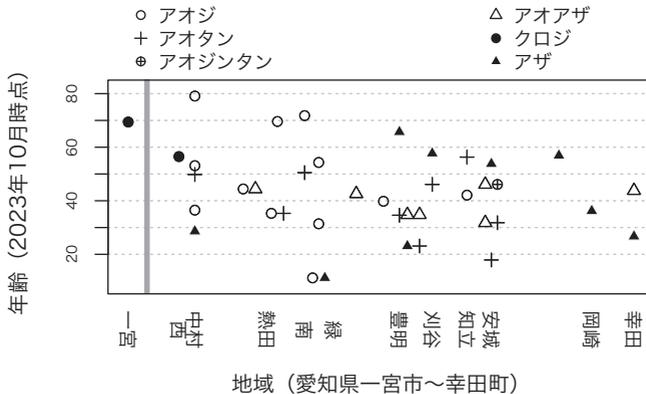


図5 あざ

5.2.6 「どこにおるわからん」の使用（図6）

吉田が在住する岐阜東濃地域の高年層から、「（声はするが）どこにいるかわからない」というようなケースで「どこにおるわからん」と助詞「か」を脱落させる発話がきかれる。「どこから来るしらんけど」（どこから来るかわからないが）という発話もあった。使用の程度や地理的分布をさぐるため本年度から調査にくわえた。使用するという回答は50歳以上にかぎられ、中年層以下に継承されない傾向があるようにみえる。一方、澤田（2023）が愛知県一宮市の若年層（18～29歳）20名に実施した対面調査によると、「どこにおるわからん」について4名、「どうなるわからん」について6名から違和感が小さい（5段階で1または2）という回答が得られている。「か」の脱落現象がその世代も耳にすることがある程度に使用されていることがうかがわれる。豊明より東では使用の回答がなく、理解する個人もすくない（「いわない」は聞いたこともないことを意味する）。従来、岐阜および愛知尾張地域のみ分布する語法だったと推測される。（吉田）

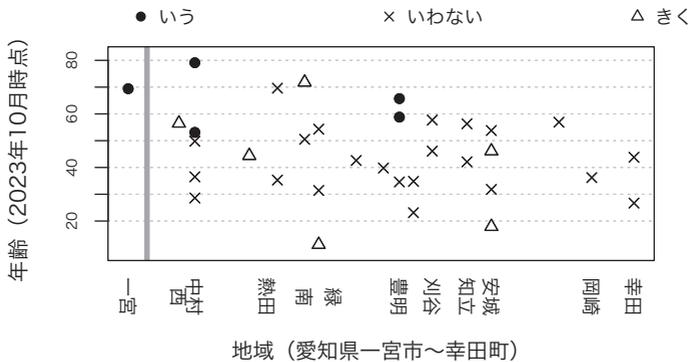


図6 「どこにおるわからん」の使用（「か」の脱落）

5.2.7 朝礼台・司令台（図7）

昨年度調査の結果から、岐阜～愛知尾張北部で「朝礼台」が優勢で、過去の結果と総合すると「司令台」の分布範囲が限られることがうかがえ、未調査の名古屋市部と周辺の調査が必要だとのべた（吉田・他2023：7-8）。今回の結果はその推測を裏付ける。「朝礼台」の使用範囲はひろく、司令台は尾張にかた

よる。ただし名古屋市内でも全員が知っているというわけではなく、(教育)行政単位で完全に規定されるというわけでもないようだ。(吉田)

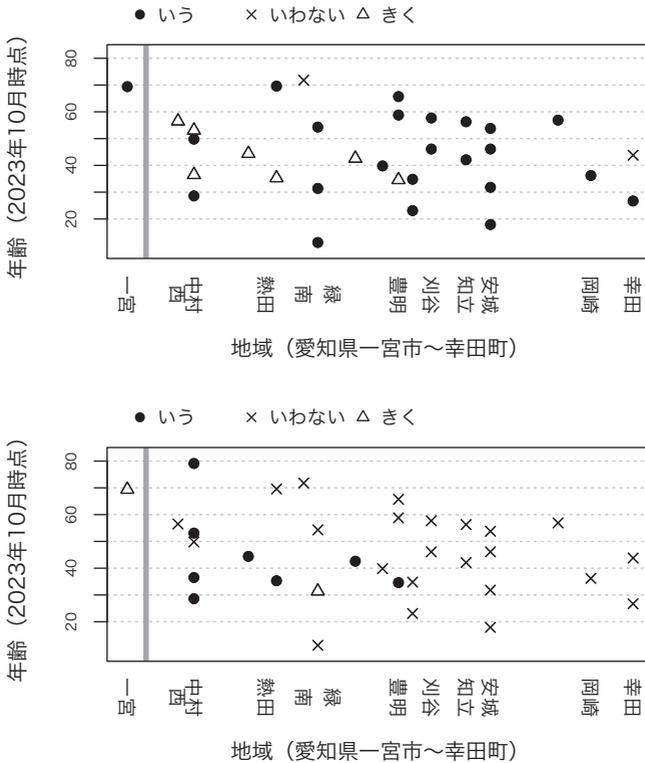


図7 校庭などの演台：「朝礼台」の使用（上）；「司令台」の使用（下）

5.2.8 とても (図8)

NLJ56 図とおなじ、「あの人の話はとてもおもしろい」という調査文による。2022年度の結果とあわせて示す。NLJで岐阜におおいドエライ・デーレーが2018年調査(岐阜～尾張～三重四日市)ではみられなかったが、2022年度調査では愛知側の高い年齢層にドエライの連母音融合形ドエリヤーがみられ、その短縮変化形とみられるデラも愛知側にみられる。今年度調査でも音変化形のデラ・デラー、デレ、ドラがおもに尾張側にみられる。2022・2023年度とも若い年齢層ではメチャ・ムチャ類が優勢である。

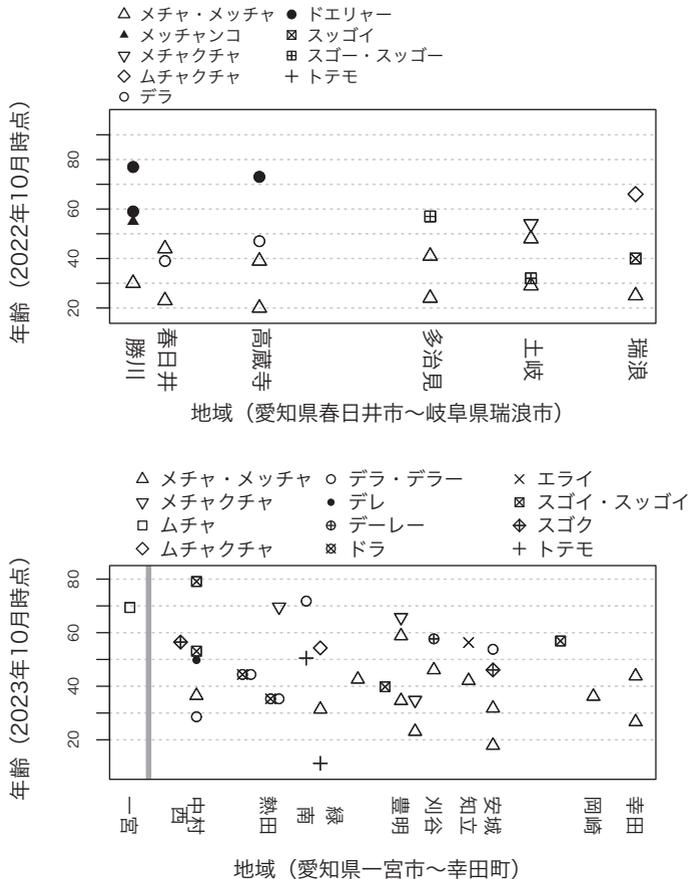


図8 とても (面白い) : 2022年調査 (上) ; 2023年調査 (下)

2018年度調査でもメッチャ、ムチャクチャが岐阜(岐南、笠松)から得られている(吉田・他 2019: 199)。総合すると、メディア等の影響で全国的に優勢になっているメ(ツ)チャ類が当地でも有力になっているが、名古屋を中心とした愛知尾張地域では旧来のドエライの改新形に一定の勢力があり、侵入をあるていど阻んでいる、ということになる。ただし、現在の行政区分における三河の話者からもドエライの改新形がこたえられている(刈谷 50、安城 50)。なんらかの接触による尾張側の影響の結果だとかんがえられる。(小島)

5.2.9 「肉」の意味 (図9)・その他

東海地域は従来「鶏」が優勢な地域だった (NLJ21 図)、その後の世代では、東「豚」と西「牛」の侵入により、「鶏」の勢力が衰えている (吉田・他 2023:7)。今回の調査でもこの傾向が確認され、「鶏」は一名だけ、「牛、豚」が拮抗し、世代差も明瞭でない。しかし西の一宮～熱田では「牛」が優勢で、それ以东 (南) の南～幸田では「豚」が優勢と、それぞれ東西からの地続きの進出の傾向がうかがえる。これもここまでの調査で確認された傾向と共通している。過去の調査の範囲とあわせると東海地域における東西の地域差がうかがいあがる。このほか、図は省略するが「ものもらい」のメンボー、メバチコ、セバイ (狭い)、アカラカス (こぼす)、オレンタチ (俺たち) の使用にも西にかたよる傾向がみられた。(赤川)

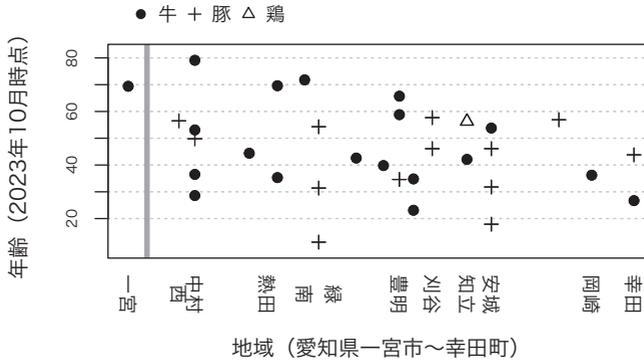


図9 「肉」は何を指すか

5.3 地域差がみられなかった項目

5.3.1 沈殿する (図10)

液体の底に成分が沈殿することをあらわす動詞は各地の方言形が維持される傾向があり、愛知にはコズムが報告されている (篠崎 1997)。しかし、2017年調査のあま市 (尾張)・西尾市旧一色町 (三河) および 2020年の尾張北部～三河西部の調査でこの意味の動詞として得られた、地域固有とおもわれる語はトゴルであり、コズムは東浦と名古屋からそれぞれ1名だけだった (吉田・他 2018: 196-197; 松川・他 2021: 130)。今回の調査地でもタマルなど地域特有ではない語をのぞくとトゴル系がつよく、コズムは一宮 60・知立 50 の2名だけ。

ここまで得られた情報を総合すると愛知県全般で有力なのはトゴルになる。吉田・他（2018：196-197）では愛知・岐阜の方言集における「風呂などにつかること」という記述（山田 2017：141）にもとづき、コズムは沈殿するという意味では使われなくなっていると推測したが、図 10 上のとおり 2022 年度調査（愛知北部～東濃）ではコズムが有力だった。東海地域全体では「沈殿する」の意味でコズムがつかわれる地域もあるとおもわれる（佐橋）。

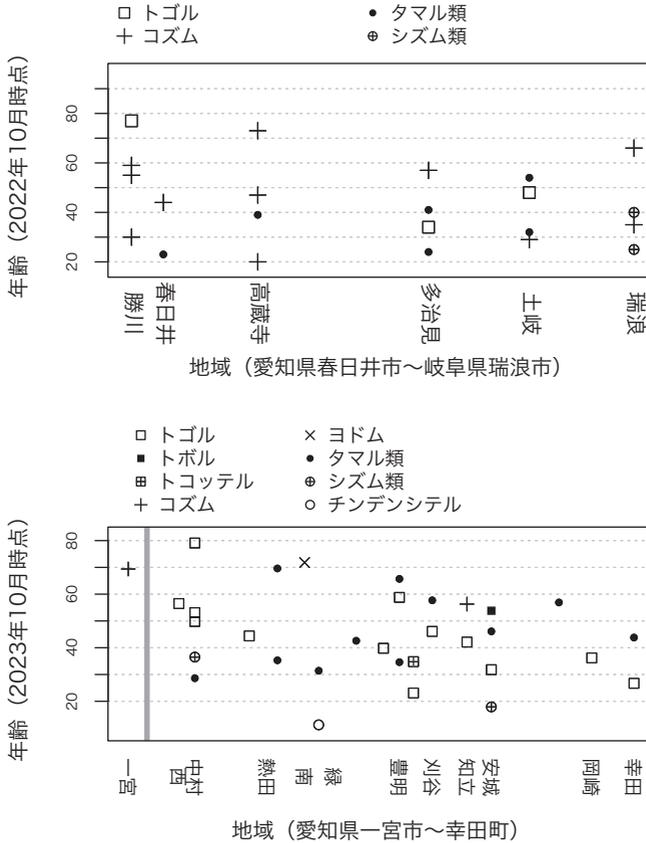


図 10 沈殿する：2022 年調査（上）；2023 年調査（下）

5.3.2 くすぐったい (図 11)

従来この地域で優勢なのはコソパイーで (LAJ33 図、『岐阜県』)、「コソ+バ

イー」に分解できる。2019年調査（吉田・他 2020：185-186）、2022年調査（未報告）とおなじく、前部要素はコソが比較的年齢がたかい話者の回答にかたより、年齢が低くなるにつれてコシヨがおおくなる。後部要素も旧来のバイーの勢力は弱く、2019年調査ではバイヤバユイがおおかった。一方、2022年調査ではバイ類はおおくなくグッタイが目立つ。本年度もおなじく、年齢が低い話者を中心にグッタイがつよい。依然、地域固有の語形の使用が維持されており、これまでの調査地域全体で有力な語形が旧来のコソバイーから改新形コシヨグッタイに移行しつつあるとみられる。（吉田）

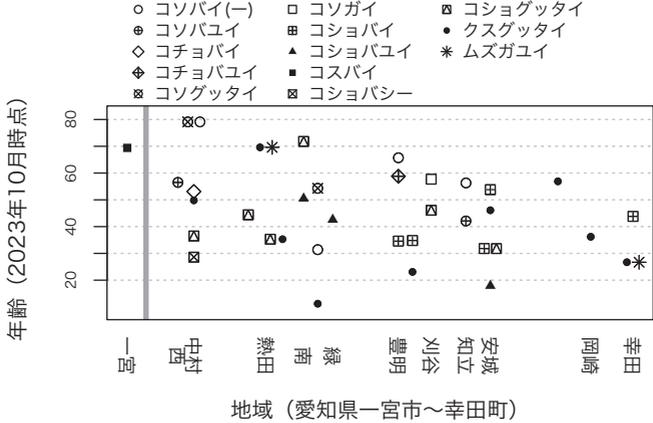


図 11 くすぐったい

5.3.3 「在所」「在所」「シタベロ」の使用 (図 12-14)

「子供たちは在所（親の生家）に行った」というときの「在所」の使用をたずねている。今回の調査地ほとんど全部で使われており、地域差ははっきりしない。一方世代差はあるようで、岡崎以東をのぞいて40歳代以上はほぼ全員「いう」であり、年齢が下るほど「きく」「いわない（聞いたこともない）」がふえる。昨年度の尾張北部～東濃の調査でもほぼおなじ年代を境にした（さらに明瞭な）世代差がみられ、地域差ははっきりしない。東海地域のかかなりひろい範囲の中年世代以上に共通して今も使われるとかがえられる。

「作りが悪くてこわれやすい」という意味の形容詞「やぐい」、舌の意味のシ

タペロの使用も、「いう」が全体的に減るが「在所」と同様の傾向をしめす。調査地ほぼ全域で「いう」がおおく、やはり年齢が下がると「きく」「いわない」がふえる。前年度調査もなじ傾向だった。(吉田)

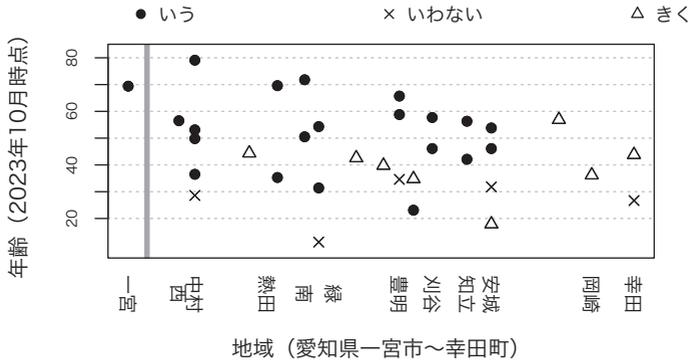


図 12 「在所 (ざいしょ)」の使用

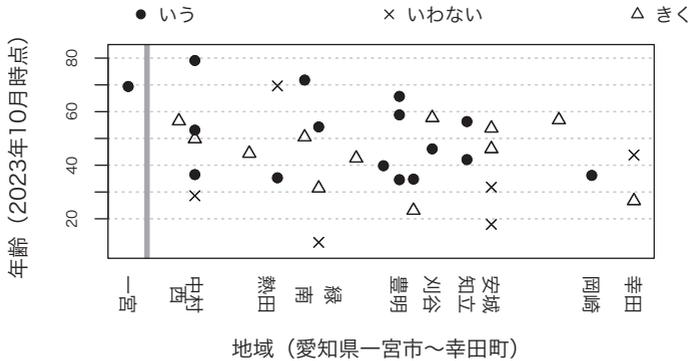


図 13 「やぐい (つくりが悪い)」の使用

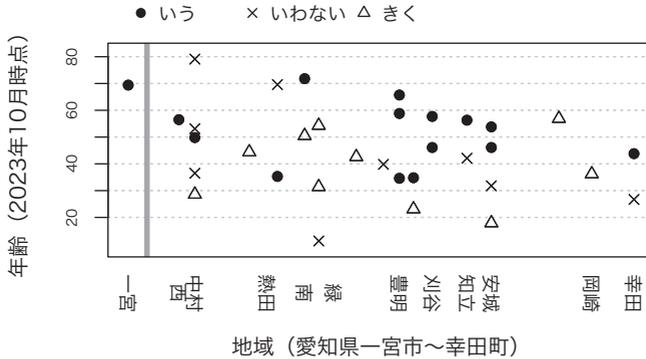


図 14 「シタペロ (舌)」の使用

5.3.4 「バカ飲む」「ドロボーケズリ」「ゴッキー」の使用 (図 15-17)

最後に、年齢差・地域差ともにみられなかった項目の結果を報告する。鉛筆の両側を削って使うドロボーケズリは最年少の南 10、安城 10、刈谷 20 から使用・理解の回答があり、いまだに若い世代にも理解する個人が少なくないらしい。吉田・他 (2023: 8-9) ではこの語の後退を予測したが、学齢期における使用があるということであれば、すぐに消失することはなさそうだ。過度な行為・状態の意味を添える接頭辞バカの例として調査した「バカ飲む」も同様で、若い世代での衰退傾向はみられない。結果表示は省略するが、前年度調査の愛知県春日井～東濃でもむしろ若い世代から使用の回答があった。

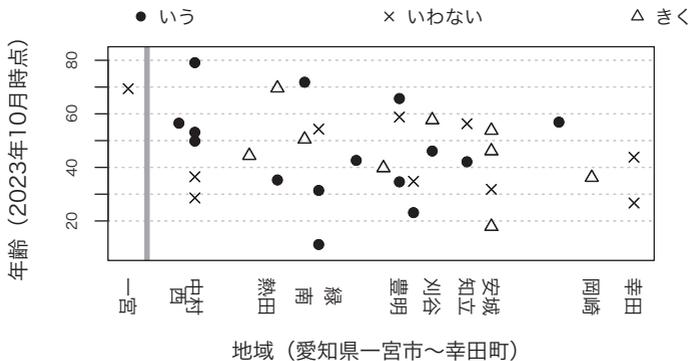


図 15 「ドロボーケズリ」の使用

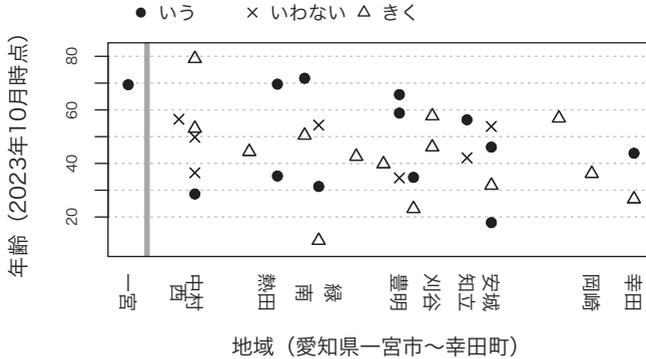


図 16 「バカ飲む (やたらたくさん飲む)」の使用

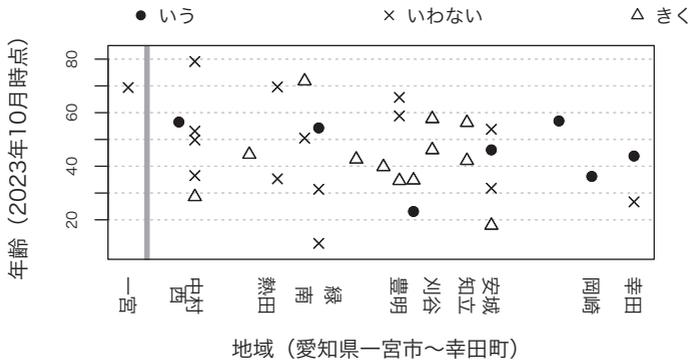


図 17 「ゴッキー (ごきぶり)」の使用

一方、ゴッキー (ゴキブリ) は、前年度調査では愛知県側の若い世代からも使用の回答があったが (吉田・他 2023 : 8)、今年度は使用・理解いずれの回答もすくない。ドロボーケズリとゴッキーは、井上 (1992) で 30 年ほど前の東海地域の「新方言」として取り上げられた項目だが、前者が比較的健在なのに対して、後者は衰退傾向で、一時的流行に終わる可能性がある。やはり婉曲を目的とした表現である、あたらしい「G (ジー)」の勢力もあわせて検討することでゴッキーの趨勢もよりあきらかになるとおもわれる。(倉知・吉田)

6. まとめと課題

2018年度に開始した名古屋都市圏言語調査の4回目の本年度は、名古屋鉄道名古屋本線に沿って、愛知県内の尾張地域から三河地域の言語使用・理解・意識の実態解明を目的とした調査をおこなった。全体として、調査前に予想したよりも地域差がみとめられた項目がおおかった(5.2節)。通学グループや指令台など、教育行政単位によって分布が規定される可能性があるものだけでなく、タワケ、「とても」のデーレー類、ヤヤコヤシイ、「どこにおるわからん」、セバイ(狭い)、アカラカス(こぼす)など、旧来の地域特有の語彙やその改新形についても概略「尾張 vs. 三河」という地域対立がみられたことは注目される。松田(2019)は、国立国語研究所の岡崎敬語調査の分析にもとづき、岡崎市について、かつての名古屋方言への志向を経て、岡崎方言への回帰へとむかう傾向を指摘する。今回の結果にみられた三河に対する尾張地域のことばの独自性はこの傾向を尾張側から裏付けるものであり、両地域のことばの差異が一部について一時期前より明瞭になる傾向が生じている可能性を示唆する。前稿(吉田・他2023)で、人の移動・移住がさかんであるにもかかわらず愛知北部(春日井市)と岐阜東濃(多治見～土岐～瑞浪)との調査結果がまとまった異なりをしめすことを報告したが、現在の東海地域にも各地域のことばが一定の差異をしめす(あるいは、つよめる)傾向が存在する可能性がかんがえられる。

一方、今回の調査地での尾張・三河の境界は豊明・刈谷間にあるが、アザのアオジ類、(机を)ツル・ズルなど、両地域の境界から西に分布が張り出す傾向がみられる項目もあった。両地域の差異化のうごきと並行して、接触によることばの流入(あるいはかつてのその傾向の残存・維持)も進行しているということだと推測される。「くすぐったい」のコソバイーからコシヨグツタイへの改新、在所、ヤゲイ、バカ飲む、シタバロの使用などについては、調査地域全体としての動き(世代差、使用の維持・後退)がみとめられた(5.3節)。また、肉の意味の東西からの流入による今回の調査地における「牛」「豚」の混在、尾張北部～東濃のコズム類にたいする今回の地域のトゴル類など、今回の調査地をふくむより領域全体における地域差も確認できた(5.2.9, 5.3.1節)。これらの異なるうごきがみとめられる状況において、東海地域に大小どのような方言圏が形成されているか(されつつあるか)、さらなる検証が必要である。

本稿では 2023 年度東海地域言語調査から、語彙項目の結果を報告した。文法・音声・言語意識などの項目の分析をすすめ、全体の情報を整理・総合する必要がある。文法・言語意識については別稿（吉田・他 2024）で報告する。

謝辞 話者の紹介、日程調整、調査会場の利用などについて、以下の諸機関のみなさまにお世話をいただきました：中村区夢づくり実行委員会、あつた宮宿会、名古屋市南区役所地域力推進室、熱田神楽保存会、名古屋市緑生涯学習センター、豊明市社会福祉協議会、刈谷市文化観光課、知立市役所経済課、安城市民交流センター、21 世紀を創る会・みかわ。また、ご参加いただいた話者のみなさまにも篤く御礼もうしあげます。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算による助成を受けています。

参考文献

- 井上史雄（1992）「東海道沿線の方言分布パターン－グロットグラムデータの多変量解析－」『言語研究』101：35-63.
- 大西拓一郎・編（2016）『新・日本語地図－分布図で見渡す方言の世界－』東京：朝倉書店
- 岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美（2017）『近畿言語地図』徳島：徳島大学日本語学研究室
- 国立国語研究所・編（1966~1974）『日本語地図 第1～6集』東京：大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（2018）「全国方言分布調査（FPJD）調査結果・新日本語地図（NLJ）データ」http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html
- 澤田萌衣（2023）「愛知県一宮市の方言調査－若年層への方言継承を中心として－」愛知淑徳大学文学部卒業論文
- 篠崎晃一（1997a）「気づかない方言 5「沈澱する」」『日本語学』16（9）：89-91.
- 松川芽衣・水野友裕・安井望恵・吉田健二（2021）「愛知県若年層方言の地理的分布の傾向：尾張北部・尾張三河境界・渥美半島地域の Web 調査から」『愛知淑徳大学国語国文』44：114-134.

- 松田謙次郎 (2019) 「岡崎敬語調査に見る「足りない」～「足らない」の変異と変化」『計量国語学』32 (2) : 66-81.
- 松本修 (1993) 『全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路』東京：太田出版
- 山田敏弘 (2017) 『改訂増補統一版 岐阜県方言辞典』ぎふ・ことばの研究ノート 17
- 吉田健二・南波茉奈 (2019) 「Web 調査による若年世代方言の全国分布」『日本語学会 2019 年秋季大会予稿集』 pp.89-96
- 吉田健二・他 (2018) 「東海地域における方言使用と印象」『愛知淑徳大学国語国文』41 : 167-198.
- 吉田健二・他 (2019) 「東海地域の言語実態調査 (1) 第一次計画と 2018 年度調査結果」『愛知淑徳大学国語国文』42 : 176-208.
- 吉田健二・他 (2020) 「東海地域の言語実態調査 (2) 愛知県尾張地域と三河地域のちがいを中心に」『愛知淑徳大学国語国文』43 : 173-192.
- 吉田健二・他 (2023) 「東海地域の言語実態調査 (3) 愛知県春日井市～岐阜県東濃 3 市のことばの連続・不連続」『愛知淑徳大学論集 - 文学部篇 -』48 : 1-22.
- 吉田健二・他 (2024) 「東海地域の言語実態調査 (4) その 2 名鉄名古屋本線沿線の言語意識・文法・ことばの印象」『愛知淑徳大学論集 - 文学部篇 -』49 : 1-12.